

第七章 現和校区

第一節 現和校区の概要

現和校区は、西は榕城校区、北は安納校区、南は安城校区に接し、東は太平洋に面している。東西約四キロメートル、南北約六キロメートルの地域で、市内最長の湊川や中小河川が水田を潤す島内有数の穀倉地帯である。

多くの伝承・伝統芸能が現在まで継承されており、歴史の深い校区である。近政・川氏・西俣・武部・浅川・田之脇・庄司浦・上之町・下之町の九集落から構成され、令和五年（二〇二三）十一月末現在の校区人口は一〇八九人である。



図8-12 現和校区の位置

第二節 現和校区の成り立ち

種子島は、院政期に藤原氏と結びついていた島津荘が、保元の乱（保元元年（一一五六）以降は近衛家を本所とする南都興福寺一条院を領家とする荘園となり、その家人伊作平氏一族が領主として湊川流域一帯を支配していたとされている。伊作平氏一族が居住していたのは、桃園集落と近政集落の間にある現和ス付近であり、現和は多禰島郡司名であった。壇の浦の戦い、鎌倉幕府の成立・滅亡後、南北朝・室町時代に入り、古来からの在地豪族や禰寝氏と肥後氏（種子島氏の祖）との領有権争いを経て、現和村の範囲が定まってきたようである。各集落の成り立ちは以下のとおりである。

近 政

種子島氏が多禰島に入部する前に領主であった称寝清種の養父佐多孫四郎親政一族が所領していたことに由来するといわれている。また、政治の中心に近く、城主の政治がよく行き届くので、近政と名付けられたという説もある。さらに、元西之表市長最上宏著の『地名考』には「近政はチカマサと読み、その昔鳥多き所とす」とある。先祖は、平氏の一族関之丞という人物で、後に橋元の姓を名乗ったとされる。先祖の墓石三柱は、西近政の旧墓地に残されていたようである。

湊川から東側を「むかえ」、西側を「本村」と呼んでいるが、

なぜそのような呼称で呼ばれるかは不明である。

近政では、種子島家の茶園があり、一人に対して一畝ずつ作らせて上納させた。茶摘みのときには、老若男女が集まって賑やかだったそうである。明治の時代まで続き、士族の上妻二郎氏が世話人であった。現在は茶の木は残っていないが、耕作していた場所は御茶園という小字名で呼ばれている。

近政は、現和で一番ミカンが採れるところで、樹齢一〇〇年を超える小ミカンの木が多くあった。また、公民館の前身は近政陸進得業部と呼ばれ、集落民の心の寄り所とされていた。

川 氏

明治十九年（一八八六）に薩摩郡下甑村の手打から移住した一九戸が母体となって開いた集落である。当初は現在地から北東へ約二キロ離れた安納近くの「万才の丘」付近に居住していたが、その後、現在地に移動した。公民館には、大正三年（一九一四）に建立された石碑があり、その苦勞を偲ばせる。

甑島は、真宗の盛んなところで信仰心も厚く、現和には真宗の寺がないため、子寺を作り、年ごとに各家庭を持ち回りとしてお寺となし、毎月集まっていたそうである。また、昭和十三年（一九三八）から同十八年にかけては、台風や豪雨などの被害も大きかったが、集落民協力しながら乗り越えてきた。

このようにして年次的に発展態勢を整え、教育方面の普及徹底、宗教の統一による精神的向上と融和協力に努め、移住一〇

〇年に際しては、公民館に記念碑を建立している。川氏の地名は、近政に居住した佐多親政の本拠佐多町に「川内」という集落があることや川の内側にあることなどから「カワウチ」が「カワウジ」に変化したのであろうとも考えられている。

西 俣

西俣の名称は、佐多・蒲生・鹿屋・郡山など県内各地にあるが、これらの地と関係があると考えられる。

『現和郷土誌』には、中世に日高氏の子孫である西俣氏が開拓し、八幡大神を祀ったとあり、毎年一月十五日に破摩祭りを行って住民の安泰を祈ってきたと記されている。その祭りには、本家日高家・分家満足山の日高家からも参拝に来ていたようである。

み山の桜は昔から有名で、西俣氏は神を祀って殿様を招き、酌婦を招いて住民をも招いて、西俣節を唄い、西俣田代で花見の宴を催したと言われている。

しかし、あまりにも頻繁に主たちがやってきて西俣を荒らすので桜を切り倒したという。

高台にある屋仁吾は、吉平氏や西俣氏の兄弟である屋仁吾氏が始祖であるとされ、屋余子・屋荷呉等とも記されている。屋仁吾には、溜池があり、広い現和浦の水源ともなっている。

また、西俣を流れる湊川には二つの堰があつて広大な水田を潤し、昭和二十九年度には相良氏が米作日一の表彰を受けてい

る。

農業の先進地でもあり、文政十二年（一八二九）には、現和村郷士遠藤惣之允（作見舞役で西俣の人）が、甘蔗の苗を植えさせたとして『種子島家譜』に記されている。

武 部

現和村は、鎌倉時代後期から禰寝一族伝来の所領になり、伊佐平氏一族の支配が続いていた地域であった。禰寝氏の先祖は建部氏であることから、武部の地名は禰寝氏支配時代の名残りだと伝えられている。集落は、山ノ寺（聖王院）から山道を通じて、中ノ坊、台運院坊などの寺への参拝道路があったという説もある。

山ノ寺のお経を埋めた経塚やその跡の豊受神社は、弓の名手向田紋太を祭った向田八幡として、公民館の一角に合祀されている。

また、『種子島家譜』に「鉄山師河辺の士、春田半エ門、逆瀬助エ門及び百姓三人を招いて鉄を現和村に鑄土、人をして練習せしむ」と記され、正徳三年（一七一三）に作られたとされる武部製鉄所は、浅川川の麻煮橋近くにある。

製鉄所の跡地が残されているのは、島内ではここだけである。明治二十四年にできた種子島初となる水車製糖所跡も、この近くにある。武部集落内には、古い城跡だとされる堂月の峯や山中には古代の隠田を連想させる院坊ヶ谷の谷田なども残されて

いる。当集落で中世から伝承されている「種子島大踊」は、県指定文化財となっており、古い歴史を感じさせる集落である。

浅 川

浅川あきこうの地名の由来は定かではないが、浅江・浅香・字香との当て字もある。浅川は、浅い川のある集落で深い川である湊川と対比したのであろうか。浅香は、昭和二十三年頃、風本神社改築の際、神社の敷地側で「南無妙法蓮華経塩釜安全を祈る。文化六年六月浅香町中」と記した石碑が発見されたことから、古い呼称であるが、字香の根拠は不明である。浅川の塩屋は、『種子島家譜』に「延亭四年丁卯三月十九日現和村浅川の塩屋の茂左衛門、不孝に坐してこれを沖之永良部島に流す。」と記されていることから、浜脇の塩屋と同じく元文三年（一七三八）頃に、開設されたものであろう。塩の製造には、多くの薪が必要で薪と塩を運ぶ馬を育てる「牧」もこの頃から発展したものである。

種子島の「産馬概史」によれば、後奈良天皇の天文の御代に、当集落民は牧畜業を盛んにし、約七〇町歩ほどの塩屋牧を経営し、明治時代には約一六〇町歩の集落共有地を持っていたようである。浅川の牧跡には、馬頭観音を祭り公民館の近くに浅浪神社を祀って集落の発展を期している。

田之脇

田之脇港は、漁港であったが、昭和二十五年に東海漁業組合の設立総会を開き、田之脇港近くに事務所が設けられた。田之脇の地名は、水田の脇の集落であることに由来しているといわれるが、「田」は湊川下流の風本神社近くにある水田であろうか。島の西の海が荒れたときは、昔から田之脇港が利用されてきた歴史があり、西南の役への出征や種子島に就航した一〇〇〇ト級の貨客船照国丸が廻航して艇で乗客貨物の積み下ろしをしたのである。当時はヤミ砂糖等を買ひ漁る商人が照国丸を利用していたので、田之脇港は県の管理港となり、以後商港にランクされて運輸省（現国土交通省）管轄になった。

田之脇港近くには、「浅丸」という小字があり、「アサマロ」と呼ぶ集落民もいるが、田之脇港近くで発見された石碑の次の文言と関連すると考えられる。碑文「伝へ曰ク古寶龜之世習宜阿曾麻呂ノ比島ニ来ルヤ乃チ当地ヨリスト（後略）」宝龜の世は大宰主神（たみのかんづき）從五位中臣習宜朝臣阿曾麻呂が多櫛守になった頃であり、口碑により「アソマロ」が「アサマロ」と伝えられたと考えられる。

また、『種子島家譜』に次の記録がある。「天保十二年十二月十三日現和村田之脇の人々（略）芝居をして叱らる。連座して庄官小山田九賀右エ門、横目鮫島周之允、羽生市郎、鮫島休次も叱らる。」

『現和郷土誌』によると、大坂からの流人僧角文が船中で記

したとされる「忠臣蔵」が、江戸時代から明治・大正・昭和まで演じられた。明治三十三年には大豊漁を祝い、三カ月の稽古を踏んで上演されたが、昭和十七年を最後に途絶え、今日まで田之脇の大狂言と伝えられている。

庄司浦

庄司浦は、平安時代から年貢の積出港であったと言われている。平安時代には湊川河口の風本浦から安納川（馬込川）・西京川河口の広い範囲を、庄司ヶ浦（庄司が管理する港）と称していたのではないかとも考えられている。庄司浦は、江戸時代に種子島の殿様に毎年ナガラメを献じ続けたことが『種子島家譜』に記されている。

また、『種子島家譜』に「長禄二年戊寅、三郎二郎を細島より迎えて現和村庄司浦に帰る。」とある。長禄二年は、一四五年であり、この時の使者が西村太郎左衛門時之・安納隠岐守実信であったとされることから「庄司浦」は、安納川（馬込川）周辺一帯を含んでいたとも考えられる。鎌倉時代には、見和村の領主である禰寝氏と種子島氏（肥後氏）の領地争いが続いており、安納隠岐守は肥後氏一族として、安納村君主となり、現和にも肥後氏一族が配されていた。

庄司浦集落は、現和村の中心地（仮屋元吉平）から北に四キロ以上、見和村の中心である現和ス付近からは旧道でも四キロ以上の地点である。集落は、年貢の積み出しや琉球貿易の拠点とし

て発展しており、現在まで伝承されている「ヨンシー踊」は、その名残りであろう。

庄司浦には、廃仏毀釈時に吉平にあった隆興寺が大定院坊跡に移されており、現在風本神社に建立されている石碑の一つは、隆興寺境内から移されたものである。集落内には、島津重豪から親孝行を褒賞された弥五郎とその娘袈婆を祀った孝子孫五郎神社があり、その遺徳を偲んでいる。

上之町・下之町

上之町・下之町一帯は、中世に吉平という名主が居住していたことから吉平と呼ばれていたという伝承がある。以来、吉平と呼ばれ、現在の上之町と下之町は一体的に発展してきた。明治初期に小学校が開校、明治中期に吉平青年会ができ、明治三十年頃からは、小学校二年生から幼年会員として青年会に入会して、討論会・読書会・珠算などを行い、十二月十四日には赤穂浪士の打ち入りの朗読会を徹夜で行い、流人僧角文の墓に詣つたと伝えられる。シャニンの葉に包んだ握飯とフダン草漬物を夜流れとして持参し、夕方に集合し、午後一〇時過ぎに食したそうである。

伝統ある吉平青年会・幼年会は、大正十三年から上之町と下之町に分かれ、天神様（菅原神社）に願立てをして活動したという。同十四年十月までは、吉平会宅が現和小的の南下にあり、吉平共立舎として共同使用されていたが、以後上之町が利用し

た。その後、下之町は昭和二年六月に、上之町は同四年十二月に公民館を落成して活動した。

廃仏毀釈以降に祀られた菅原神社には、僧角文の碑や願立ての碑があり、碑文には吉平共立舎と刻まれており、両集落協力の下に現在まで運営されている。また、上之町内の小集落である泉原には、「のべおうの貝塚」と呼ばれる太古の遺跡も発見されており、原始時代から人々が住んでいたとされている。

一 大字現和の小字一覽

孝行門、中庄司浦、下庄司浦、上差辺、中差辺、下於佐野、南高松、北高松、峰ノ小田、上於佐野、日之小田、阿鹿野、伊佐ケ、南四本松、赤土ケ当、北四本松、西之小田、上吉田ケ峰、下吉田ケ峰、下冷水、上冷水、上妙角、上妙角、下俣り坂、下福メキ、上福メキ、中横峰、下横峰、尻ケ中崎、上横峰、上俣り坂、草木之頭、馬走ケ頭、上草木、中草木、草木之平、中峰、東草木、上之平、寺園、下名子、一葉、スタ渡瀬、上ワラビ、下ワラビ、上名子、蕨、下長小田、上長小田、北ワラビ、尻トキリ峰、黒土田、下釜土谷、上釜土谷、上穴野、中穴野、戸場佐、下戸場佐、下穴野、内和、小谷、家之上、大四郎、北俣り坂、大道添、内谷、上剥峰、中剥峰、下剥峰、狸山、下打越、中打越、上打越、駄竹、森之北、黒之鼻、中手水、峰下、上赤木、大駄竹平、下方氏、中方氏、上方氏、南方氏、落之下、高星之平、中峰、下峰下、北穴野、南穴野、峰下、上北スタ渡ゼ、上中スタ渡ゼ、上南スタ渡ゼ、北面、東片吹山、中片吹山、酢之木渡瀬、酢木中鼻、西片吹山、赤尾木曾利、中野大峰、桑久保、論ケ大田、水無川、下赤尾木山、上赤尾木山、落之鼻、萬左、行無、高ベノ平、河氏、西行無、萬左工門、北萬左、下行無四郎、下田代、上田代、上一番野峰、古大道、溜池、上之峰、

耳切ケ頭、西上之峰、東松峰、東近政、下笹嵐、中近政、笹嵐、大四郎坂、周左工門開、割峰、東星ノ木、西星ノ木、大石ノ本、御茶園、上野平、西上野開、東上野開、松之本、要之長山、下須田之山、上須田之峰、上馴シケ田尾、下馴シケ田尾、西現和ス、上現和ス、中現和ス、下現和ス、前浦、西近政、長野、六郎之進、田代川、南川氏、茂多江、大迫、門之田尾、山之小田、向之小田、新道田、長久保、山田、下丸田、後西侯、園田、比良之小田、八重牧、赤牟田、西俣田代、春田ケ峰、岩城、池ノ田代、弓揚之平、北回田、南回田、平ノ谷、現和ス、上平野、南中現和ス、南上現和ス、南西現和ス、上大峰、中大峰、下大峰、比良野平、中田、囔々ケ野、亀割川、成り松、松峰尾、猪ノ氏、知伊勢、曾太郎、屋荷呉畑、川二ツ、カタシガ田尾、白杵之峰、白杵、内之中野、院房、門之本、枯キガスミ、三山、中西侯、喜加野坂、上喜加野、中平、下喜加野、トビ松、大太郎、前西侯、前田、大正寺、大新開、大門口、中之割、森田、西之門、大町、牟田、堅田、開キ、隈崎、大宮田、久保田、平田、原野小田、堂之平、鳥越、大久保、瀬戸、上屋荷呉、下屋荷呉、椎之木小田、寄妙、野辻松、浅山、菖蒲ケ小田、塔入道、上大久保、中之峰、野首、谷川、上松原、古風本、上古風本、上大西、下大西、石之峰、指辺、中原、堤ケ中原、横大路、平磯、中平磯、西平磯、保曾利、小泉、下平磯、深田平、南浜深田、北浜深田、西方之平、東方之平、荒崎、浅丸、上田之脇、下田ノ脇、東泉原、西泉原、上御山、下御山、宮田、大俣、内

ノ堂、神田、屋中田、大藺原、下渡瀬、上渡瀬、東久保川、北久保川、鍛冶屋原、元屋鋪、上中園、下中園、西飯屋園、東飯屋園、松崎、西小園、東小園、北下之原、南下之原、里原、猪ノ子、寺ガ入、小宮田、西平田、新開、中島、城ヶ崎、公田、友近、長田、斜ノ大田、源太ヶ田代、直助峰、西道月、東道月、北道月、東小太郎、西小太郎、下野佐ノ和、堤、西源太、高井、中佐野和、轟、南佐野和、上高井、男鹿廻、西轟、東ウスキ、西男鹿廻、菜種子木場、檜之木間伏、東餘利、西餘利、大徒切レ、大曲リ、西垣内、東垣内、士呂九郎、長尾呂谷、木持峰、相中山、西小松峯尾、東小松峯尾、大道、林野山、手石之渡瀬、朽木、西横野、横野平、横野谷、中横野、東横野、柿木、木原、小川谷、山道之平、牧田代、下池之迫、和良比ノ角、大割之平、池野迫、満平、猿搔、才方、大田代、青ナキ、橋取峰、東平、中野宇都、鍋取牧、敬ノス、二俣野、西美鳥、東牧田代、東ミドリ、開キ、下村、石原平、押方、長谷、上浅川、下浅川、前浅川、九郎三九、上大テギ、笹林、ツ、ラガ谷、トサコ、新田之中野、下大テキ、カトラケ小田、柳ノ俣、ヤサノワ、アラマキ田、ミタリ山、アラン野、東堀ヶ野、西堀ヶ野、志ツ葉峰、明孝田、大平、上仁田、下仁田

二 特徴的な地名など

お茶園

種子島家の茶園として一人に対して一畝ずつ作らせて上納さ

せた。茶摘みのときには、老若男女集まって賑やかだったそうである。明治の時代まで続き、土族上妻二郎氏が世話人であった。西近政の北に各人の茶園の跡と思われる一畝程度の畑があったが自然に統合され、今は茶の木は残っていない。〔現和郷土誌〕

猪ノ子（イノコ）

現和の小字図では、湊川下流域に次の表記で「猪の子」名が二カ所見られる。

○猪の子（寺ガ入）

○寺ガ入（猪の子）

この二つの表記から、「猪の子」の小字名は、寺や神社と関係があると考えられる。「猪の子」は「亥子（イノコ）」に通じ、風本神社（風本勸限）や聖主院、台運院坊、中ノ坊等の寺へ通じる位置に当たることから、「猪子祝（イノコイワイ）」に関連するものではないかと考えられる。「猪子祝」は、陰暦十月の亥の日の亥の刻に、餅を食べて万病を除くまじないをする習わしであったという。

茨川（イワランコウ）

昔から、ガラッパとヌレヨメジヨウが出没するという話が語り継がれているのが茨川である。酔っぱらってそこを通る時にガラッパと相撲をとったという人や見知らぬ美人にたぶらかさ

れたという話が伝わっている。川の名前が珍しいので、その川の名前や場所を知っている人は少ない。

茨川は、そのまま読めばイバラカワとなるのであろうが、川を(コウ)と呼ぶことから、「イバラのコウ」が「イワランコウ」になったものである。この川は小さな谷川で、谷川(タンノコウ)・久保川(クボンコウ)・保曾利(ホソリ)・東浦(ヒガシウラ)の四つの谷あいを通れる川が合流した小川である。場所は、田之脇から泉原の坂を下って上之町に行く道路と下之町に行く道路が交わった三差路である。上流は古風本辺りで、水量も豊富であり風本の大宮田を潤している。ちなみに、湊川の最も河口に近い支流で、東浦橋近くが川尻である。

古風本(元風本)

泉原の北西に古風本という小字がある。田之脇の西平磯の奥、上之町の谷川の東側に当たる付近であろうか。地元の人々がなぜこの名前で呼ぶのか気になるところである。名称から考えると、古い時代に仏教が種子島に伝わった頃、最初に寺や神社があった場所だったのではないかと想像し、現在の風本神社と関係があるのではないかと考えられる。

第四節 歴史的特殊性

現和は、湊川流域に広がる水田と琉球や中国との交易拠点となった風本浦を中心にして発展したとされる地域であり、古来から種子島を治めてきた諸氏は、このような現和地域に注目し、種子島を経済的に支える地域として重要視してきた。

その歴史は、現和の地域が「見和村」「吉平村」「現和村」という呼称の変遷とも関係がありそうなので、歴史的背景として次のことを紹介しておきたい。

(ア) 古代に見和村と呼ばれた現和については、承久三年(一二三二)、大隅国守護所下文に御家人見和平次有光安堵のことと思われるが、見和村の名主であろうが、その系譜を知らない。

(イ) 平安時代後半、多禰島が近衛家領島津庄として立庄以来伊佐平氏の一流が庄務をとっていた。御家人見和平次有光というのは、その居所によって称したものであろうから、見和(現和)が多禰郡司(庄司)の本来の居所であったとも考えられる。

(ウ) 現和村の地頭に吉平という人物がいたことから、吉平村と呼ばれるようになった。

(ア)・(イ)は、『種子島民俗』一四号に掲載された元鹿見島大学教授五味克夫氏の論文「平姓多称島郡司と見和村名主職の史料」を要約したものであり、(ウ)は地域の伝承である。

一 現和村の呼称の変遷について

現在の現和校区には、歴史上「見和村」「吉平村」「現和村」という三つの村名があった。その由来についての歴史的背景は、謎のままであるが、既出の五味氏の論文等から、領地と村名については図8-13にまとめた。ここから現和村の歴史に迫りたい。

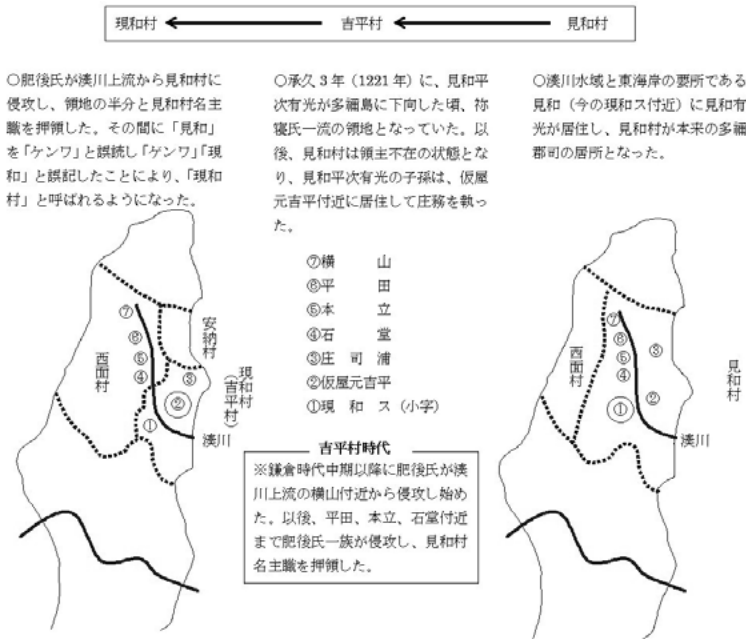


図8-13 現和村の歴史的イメージ

見和村

種子島は古代から各地との交流、特に瀬戸内海各地・壹岐・対馬・大宰府をはじめとする北九州、山口や九州各県との交流等があったといわれている。「見和村」の呼称については、山口県に「熊毛・多仁・美和」などの郷名があったことから、人々の往来によって「見和村」という村名が生まれたという説がある。この説に対して、律令時代から鎌倉時代初頭まで見和村に居住したとされる伊佐平氏一族の「多称郡司」、庄司とも名主とも呼ばれる「見和有光」が代々居住したことから見和村になったとする説がある。

そこで、この二つの説について紹介してみたい。

古代からの交流による「見和村」説

種子島の西之表は、古代には熊毛郡であったとされている。その由来は明らかでないが、山口県にも古代から現在に至るまで「熊毛郡」という地名があり、『角川日本地名大辞典35山口県』には次のように紹介されている。

天平八年には遣新羅使阿部継麻呂一向が西下の途中熊毛浦で船泊している。(万葉集)『和名抄』に見える管郷は、周防・熊毛・多仁・美和・全部・駅家・波濃の七郷。但し、高山寺本では、全部・駅家を欠く。

種子島の人々は、海の道を通して古代から瀬戸内海・山口県・北九州・壹岐・対馬等との交流があったことから、「熊毛・多仁・美和・波濃」の地名に注目したい。それは、種子島(現

和村)の地名にも「熊毛・多仁(多称)・美和(見和)」が関係しているからである。「見和」の地名が古代から種子島にあつたとしても不思議ではない。また、湊川水系の水田は、南種子町の茎永とともに重要な土地とされ、湊川河口付近を中心とした東海岸の港は、琉球や中国等の南方の交易上重要な役割を果たしていたようである。このことから、見和村(現和村)は、古代から種子島郡司の居所であつたという説は頷ける。その後、代々の郡司が居住し続け、近政集落付近の山地を「ゲンナス」と称するようになったと伝えられる。このように、ミワ(美和・見和)は、古代から中世にかけて、種子島の中で重要な意味を持つ地域であつたと言われている。

ちなみに、「ゲンナス」付近は、甲女川と湊川、西面村と現和村を結ぶ中間地点でもあり、古代の熊毛郡を支配する重要な地点であつたと考えられ、古い歴史が秘められた地域であるともいわれる。

見和有光居住による「見和村説」

図8-14は、鎌倉時代当初の建久八年(一一九七)の大隅国建久岡田帳と揖宿平氏系図の一部であるが、この時代前後の多禰島郡司は次のようになっている。

- ・近衛 家人 見和平次郎有光(『地理纂考』)
- ・御 家人 見和平次郎有光(『三三国名勝図絵』)
- ・近衛家の代官 見和十次郎有光(『南島偉功伝』)
- ・御 家人 見和平次有光(『池端文書』)

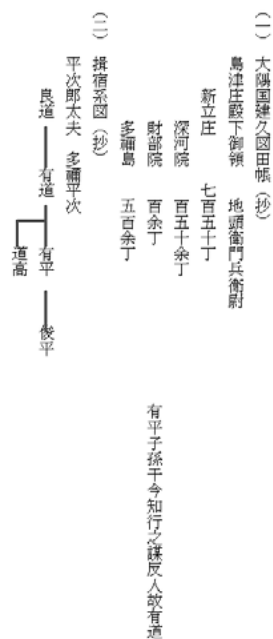


図8-14 大隅国建久岡田帳(抄)と揖宿系図(抄)

各々の資料により「近衛家人」「御家人」「近衛家の代官」と異なっており、「見和有光」は、共通の名となっている。また、揖宿系図の有道や有平等の複数名を指すのか、同一人物を指すのかも不明である。

そこで、承久三年(一二二二)に下向したとされる「見和平次有光」と「見和村」とに関する説について紹介したい。

元鹿兒島大学教授の五味氏は、『種子島民俗』一四号所収の論文「平姓多称島郡司と見和村名主職の史料」で次のように記している。

この史料が池端文書の中に伝えられて

- (大隅国ノ誤ナラン)
- (五)薩摩国守護所下文(池端文書)
- (端裏書)
- 「あんとの御下文
- (黒筆)
- 「多禰島」
- 御家人見和平次有光入見参籠下向也、可令安穩申之状加件
- 承久三年十二月日 守護所(花押)

図8-15 薩摩国守護所下文(『池端文書』)

見和村名主職が相伝されたことによるものである。この文書は、(中略) 有光に所職を安堵したことを示しているものである。所職の内容は記されておらず、明らかでないが、見和村名主職ということになるか。或いは、これが本来の郡司名であったのかもしれない。

さらに、同論文内で次のように記していることにも注目したい。

承久三年は、承久合戦のあった年で、この安堵が同合戦と関係があった可能性も充分にある。

これらのことから、見和平次有光の下向は、当時の政治的背景が濃く反映されていると考えるべきであろう。

さらに、五味氏は「現和村に関する史料のみがまとまって残っていることは、池端文書の残存というただそれだけの理由ではなく、やはり現和村の多禰島にしろ意味の深さを示しているように思われるが、如何であろうか。」と有光の謎を投げかけている。この史料に関して平安時代後半より多禰島郡司として伊佐平氏の一流が庄務をとり、島を統括していたと考えられると五味氏は述べている。五味氏は池端文書の御家人見和平次有光とあるのは、その名称から見て、有平の後ではないかとも推測できるとしている。

小川亥三郎氏は『種子島民俗』一九号掲載の論文「現和・武部」で次のように述べている。

現和のものとの地名見和(みわ)の起源については、平次

有光が見和村に住んだから、地名をとって見和平次有光と名乗ったという考え方もありうるが、私はそうではないと思う。何となれば、前記守護所下文にはつきりと『御家人見和平次有光を謁見(見参)させ多禰島に下向させる』とあるから、多禰島に下向前から、見和という姓であったことが分かる。この下文には見和村という地名は出ていない。

(中略) 見和(みわ)という地名は、県内にはほかにみられない。ミワという地名は奈良県を中心として東西に広がっている。(中略) 茨城県に見和という地名があるから、ひよっとしたら見和平次有光は今の茨城県(常陸国)あたりの人であったかも知れない。

また、「御家人見和平次有光見参被下向」とあることから、逆に、見和村に居住することを前提にし、「見和平次有光」名を与えて下向させた可能性もあると推測される。この説明では、「見和有光」は一人かという疑問と、「見和平次有光」はどこから来たかという二つの疑問が残るばかりであり、「見和村は古代からの村名か」という答えも出せない。

吉平村

平安時代は、郡司の称が慣例上使われていたようであるが、実は庄司の称でもあったともいわれる。

現和校区内には、「庄司浦」という集落名もあり、多禰島郡司との関係があるのではないかという民俗学者である下野敏見

氏のご示唆を受け、五味氏は吉平村の伝承に注目し、『種子島民俗』一四号所収の論文「平姓多称島郡司と見和村名主職の史料」で次のように述べている。

種子島家所蔵の『再撰方申出覚帳 御記録方』にも「一家中之内ニ吉平何某と申も有之由、前代現和村地頭職たりし由、右之家筋御用見合相成候間、系図又は由書之書付、格護可有之間、可差出候」と見えるのもこのことと関係あるのかもしれない。

つまり、吉平村の由来には、「現和村地頭職」に「吉平姓」という人物がいたという伝承があることを取り上げている。

由来についての二つの説

由来については、次の二つの説があるので紹介したい。

(1) 時代は不明であるが、自然発生的に小字「吉平」の地名が起こったとする説

現和の上之町集落と下之町集落は、明治時代まで「吉平」の集落名であり、現在の校長住宅前(前の水道タンク)から体育館裏の道路に通じる導線の北が上之町、南が下之町となった。

「吉平」の起こりやその時代については不明であるが、次の二説が考えられる。

① 現和の浅川集落の牧に「太平」の小字名がある。また、現和村の北部の安納村にも「太平」という集落がある。「吉平」という地名も、一帯が豊かな農耕・牧畜地であったことから、その中間を称した字名(集落名)だ

とする説

② 現和に「吉平」姓の「地頭」が居住したので吉平村名が生じたとする説。地頭「見和平次有光」が大蔵吉平氏であることについては、後述する(ただ、その後、領主不在の状態になったので吉平村名は消えたと考えられる)。

①については、自然発生的に「吉平」の小字が発生したとする説について、いつの時代に吉平に変わったのかが不明であり、確証ある答えは導き出せない。

また、②については、「見和平次有光」については、承久の乱(承久三年(一二二二)の十二月)に下向しているというところから、先述の五味氏説と小川氏説との双方を考察した結果、「見和平次有光」は「大蔵吉平氏」の一族である可能性が高く、肯定的に捉えられる。したがって、この時代に一時的に「吉平村」名で呼ばれたことはあるが、領主が伊佐平氏一族のままだったので、元の「見和村」名が残ったということになる。

(2) 室町時代後半に、現和村地頭榎本氏が「吉平」に住んだので、吉平姓を名乗り、吉平村名がついたとする説

慶長年間(一五九六〜一六一五)に作成された慶長高帳には「吉平村」とある。一六一五年には年号が元和・ゲンナに改元された。

この説については、室町時代以前に「吉平」の集落名が生じていたことが明白になり、『慶長高帳』に「吉平村」名が記さ

れていることが確かな証拠にもなる。

吉平村の村名については、(1)と(2)の両方の説ともにならずけるが、(1)①の自然発生説の可能性は低いと考えられる。

現和村

建武三年(一三三六)に大隅国禰寝院禰寝清種は、「右於見和村者、養父佐多孫四郎親政重代相伝地也、(中略)」と日向国守護職畠山直顕に肥後氏一族が多嶺島の見和村を押し領していると訴えている。

それに対して、建武四年(一三三七)、「畠山直顕安堵状」と「打渡状案」には、「大隅国多祢島内現和村名主職事」について、「大隅国多祢島現和村名主職のことは、前の領主が減んだままで新領主がない莊園を、この間君主のため、軍隊の管領として申し付けたものであるので、領地の半分を渡し残りを清種とする」との返書を送っている。

ここで、鎌倉時代に見和村を領した禰寝氏が「見和村」と呼んでいるのに対し、畠山氏は「現和村」としていることが現和村という村名の始まりだとされている。つまり、「現和村」は守護所が「見和(ミワ)」を「ケンワ」と誤読し、さらに「現和(ゲンワ)」と誤記したものであろうといわれている。

その後も、禰寝氏と肥後氏の領地争いは続いたが、永和二年(一二三六)に禰寝氏と肥後氏が和解し、肥後氏が多祢島領主

としての支配権を確立するが、その後、どのように呼ばれたのかは不明である。

呼称の変遷のまとめ

これまで述べてきたことをまとめると、見和村↓吉平村↓見和村↓現和村↓吉平村↓現和村と時代によって変わってきたことがわかる。それを順番に説明すると、次のようになる。

- 1 見和村は、律令時代に人々の行き来により、山口県熊毛郡との関係において生じた村名である。
- 2 律令時代に多祢島郡司になった伊佐(阿多)平氏一族が領主の時代(禰寝氏の多祢島『見和村』名主職時代Ⅱ鎌倉時代中)には、見和村名で呼ばれた。
- 3 承久三年(一二二二)に「見和平次有光」が見和村に下向し、一時的に「吉平村」と呼ばれたが、その後も伊佐平氏の支配が変わらないまま見和村名主職は禰寝氏一族の佐多氏に引き継がれ、「見和村」の呼称に返った。
- 4 伊佐平氏の後を継いで見和村名主職となった禰寝一族は、伊佐平氏に多祢郡司を任せたまま領地の統治を放置したため、肥後氏一族と禰寝氏一族の領地争いが続いた。肥後氏は、鎌倉時代から禰寝氏の領有していた見和村名主職を押し領し、鎌倉幕府が滅びた南北朝(室町)時代には、現和ス付近を中心とした見和村の領地が半分になり、建武四年(一三三七)頃には、現在の上之町・下之町(吉平集落・仮屋元吉平)を中

心とする現和村となった。

5 肥後氏一族と禰寝一族は、永和三年（一三七六年）九州探題の勧めに応じて和解し、種子島氏が入島したことにより、古代から続いた伊作平氏一族や禰寝一族の多称島知行は終わり、見和村や吉平村の名も忘れられ、伝承として残るのみとなった。

6 室町時代の中頃、現和村領主榎本氏が、現在の上之町・下之町（吉平集落・仮屋元吉平）に居住し、島津貴久の「島津氏庶氏はその居住地の地名を称するべき」という名により、吉平姓を名乗った。この頃の現和領主は島津氏の縁戚川上氏一族であり、吉平姓を名乗ったので、慶長年間（一五九六～一六一五）の慶長高帳には現和村名はなく「吉平村」名になっている。しかし、『種子島家譜』では、「現和村」の呼称で呼ばれている。いずれにしても、「現和村」は三つの名前ではばれている。

7 京都大学附属図書館所蔵の「大隅國熊毛郡種子嶋沿海圖」には、現和あたりに「西面村枝種子嶋村」と記されている。

第五節 移 住

「現和メモ」にみる川氏集落の開拓

現和校区の川氏集落は、明治十九年（一八八六）の甌島からの移住者によって作られた。『南島民俗』二二号所収の「現和メモ」に山口又夫氏が川氏の移住について詳しく紹介しているので引用する。

種子島への移住の問題については、既に多くの報告があり、入植当時の苦勞など、共通性を持った点が多くあげられている。ここ川氏については、先住地の状況について知る者が少なく、知る人も老体のため、なかなか現地調査が容易でなかった。わたしも、四回目にやっと確認できた。小屋跡の地は安納近くで、万才の丘になっている。小屋は四軒ぐらい（これははっきりしない）で、並んで建てられていた。

昭和十三年から十八年にかけての台風・豪雨などの徹底的な被害を受けた。甌島からの移住であり、川氏は、手打からの十九戸がその母体となっている。

移住地を分散にするか、同族集落にするか、配置方法も対立し、結局、西之表では新開拓地となる人里はなれた原野に小屋を建てた。しかも、長屋式の小屋であった。

川氏の場合、それが図（図8-16）に示した万才の「タ

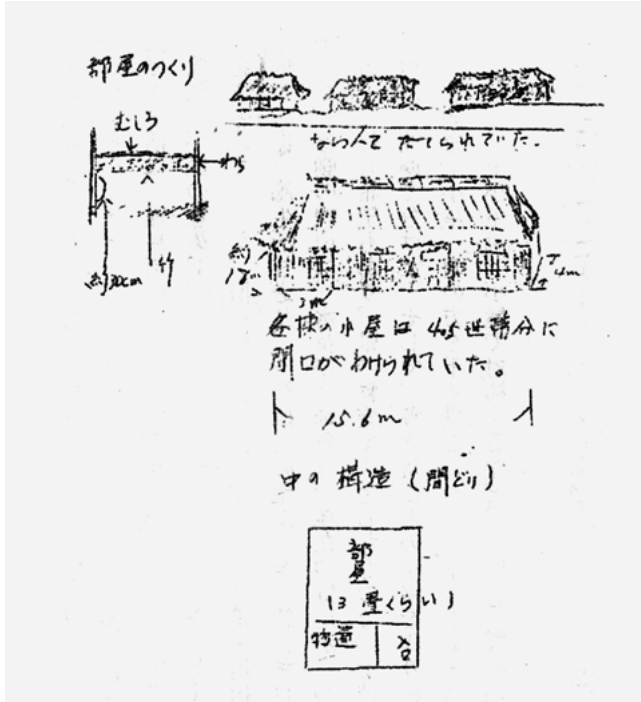


図8-17 移住当時の小屋のつくり



図8-16 移住当時の小屋跡

マイケ」といわれる地であった。受け入れる校区は、小屋の建築をし、生活用具や農具若干は、県から支給された。

南日本新聞社編「鹿児島百年」に、開拓者住宅の規格は、座敷約十平方尺、土間が約七平方尺、家具は一戸につき、水桶一荷、小オケ、ヒシヤク、ナベ、それぞれ一個ずつ、他に家族の人数に応じ、肥料オケやおノ、ナタ、山グワ、鎌、砥石などが貸与された。

長屋式の小屋は現和校区が造ったもので、丸太と竹を使い、茅葺の掘立小屋であった。

一棟に五世帯ぐらい入っていた。屋根は、低めで世帯ごとに茅壁で間取りがしていた。一世帯分は、間口約三尺、奥行四尺ぐらいで、土間と床上げた座敷からなっていた。土間の部分は、入り口と物置で、座敷は竹あみで上に藁を敷き、さらに、むしろをしいたものだった。

炊事場は、火事の危険があること、狭いことなどの理由で、各世帯ごとに外に作った。窯は石を積み上げ、泥で固めたもので、簡単な屋根をつけていた。「小屋の耐久力はせいぜい二年ぐらいで・・・」(鹿児島百年)といわれ、仮の住居にすぎなかった。

長屋の生活は、甌島での旧氏族が中心となり、集落としての発展をなした。特に甌島は、氏族・平民の意識が強く、かつて甌島で村長までやった江口氏などが有力者として一行をまとめていった。旧氏族は、江口・長浜・種子田・迫

田・松田の各家である。

一年余の仮小屋生活を送り、一行はその地から南へ約二キロ下った現在地に移動した。移動の理由は、水及び立地条件で現在地は川が二つもあり、平地で肥沃な地である。一行の希望もあり、県の斡旋で決定したもので、土地はそれぞれ十九号まで番号をつけ、抽選で分けた。そして、各世帯ごとの小屋を作り移動した。現地の道路を挟んで、北側を上小屋、南の方を下小屋といって、昭和十七・八年頃までは、十五夜のつな引きなど、上小屋対下小屋で対抗するなど、小屋の集落が地形上二分されたようである。

「島に説教所がないことも、彼らには不満だった。甌島は昔から真宗の盛んなところで、・・・翌二十年一月東本願寺の普教者を島に呼び、巡回説教させた。」(鹿児島百年) 信仰心が厚く、年ごとに、各家庭を持ち回りでお寺とし、もとは、毎月、三・十三・十五・十八に集まっていた。「その場で子どもなど泣かせると叱られるものだった。」というように厳しいもので、結婚も他宗派とはほとんどしなかった。

現在も川氏の各家庭には立派な仏壇があり、信仰心が厚い。

以上は、川氏、橋野吉秀さん(八十歳)、江口政男さん(七八歳)からお聞きしたことです。

移住記念碑

川氏公民館敷地内に移住記念碑が立っている。碑文は次のとおりである。

「移住記念碑」

故郷甌島累年凶作ノ災害ヲ蒙リ縣救済ノ下ニ明治十九年四月十一日薩摩郡下甌村手打ヲ發シ同月十三日種子島へ到着シ此地ニ移リテ以テ永住ノ地ト爲ス此地素蓬茅生茂地味瘠薄ニシテ開拓困難ナリシカド上 皇恩ノ渥キニ浴シ下現和区民ノ同情ニ沾ヒ發情激励以テ今日ノ盛ヲ到ス顧ミレバ墳墓ノ地ヲ棄テテヨリ二十有九年郷黨親睦シ戸々鼓腹ノ樂ヲ享クルモノ夫レ誰ガ賜ゾ兒孫後昆長ク其徳ヲ欣仰シ以テ家ヲ興シ世ヲ益センコ

トヲ期セヨ

大正三年三月十日

謹建



左：移住記念碑、右：創設百周年記念之碑

第八節 戦争と疎開

太平洋戦争は、現和校区にも大きな被害を与えた。『西之表市年表』によると、昭和二十年（一九四五）六月十六日に小型機八機が現和国民学校を銃撃し、教員一人が死亡した（後述する木原平五郎先生）。現和小学校創立一〇〇周年記念誌『現和の百年』に、戦時中学童疎開を体験した二宮大陸氏の思い出が掲載されているので、引用する。

私の小学校時代では、羽月に疎開した当時の事を思い出します。昭和二十年私は国民学校五年生でした。その頃太平洋戦争で日本は敗戦の色がこくなっていました。南の島々がやられ本土へと近づいて来ました。三月十八日種子島の東海岸が空襲にありました。四月二十七日の事です。私は友達と磯に行っていました。ところが丘の方で「家に帰れ」と声がかかったので何があったのかと思いつながら帰って見ると、遠い所に行くようになったから早く準備をせよとの事です。用意されたリックサックを背おい、わらぞうりをはき、防空帽子を持って遠足に行く気持ちで家を出ました。疎開するのです。疎開する人は二年生から六年生までの二八〇名と引率の先生六名、保護婦十二名でした。私達は西之表の小牧公民館迄歩いて、そこで父母達とは別れなければなりません。夜の十時に乗船し、出港は十二時頃でした。その時の橘丸は八時間位もかかっていました。

敵機に見つけられない為か、船内は真暗、時々目をさまして家の事を思い出して泣く人もいました。やがて夜が明け鹿兒島に着き、駅迄歩き汽車に乗りました。初めて見る汽車、みんなけしきに見とれながら家の事も忘れていました。列車は大口へと走って行きます。大口に着き、そこから羽月迄歩きました。三K位もあつたでしょうか。途中大口と羽月の間を流れる川があり、そこで手・足・顔を洗って行きました。学校に着くと児童・父兄達が迎えに来ていました。色々と話があつてから、それぞれの部落に別れたのです。まず近政が上の馬場、川氏が山の口、西俣が大島北、武部が園田・鳥巢・村岡、浅川が金波田・萩の谷、田之脇が並木・包の原・本町、上之町が駅前・堂崎、下之町が下西多良、そして庄司浦が白木上・下でした。白木は遠い所で三K以上もあり学校から又歩きました。二年生と言つても、二年になつたばかり、しかし皆んな手を握り合い頑張りながら歩いて行きました。四月と言つても山おくの白木はまだ寒さを感じました。部落に近づく頃は薄暗くなり、はいたぞうりのおがき裸足で歩きました。一人へり二人へりしながら決められた家へと手をひかれてみんな行きます。どこともあてのない所に皆んな涙を流しながら別れて行くのでした。その時私はさびしいと言うか、たよりないと言うか、あわれを感じたのです。宿の人達はみんな暖かくしてくれました。その夜は旅のつかれかぐつすりねむり

ました。夜が明け弟も近くに居る事を知り喜びました。学校に集まると部落のこと、友達の話しはずみです。学校が休みの時は田畑家の手伝いをしました。しかし我が家の様にきまつた事は出来ません。月日が立つにつれ仕事にもなれ遠い所にも遊びに行く様になりました。羽月と言えば伊佐米といって県でも米のおいしい所。食物そのほかふじゆうはしませんでした。そして八月十五日遂に日本は戦に敗けました。このあいだに現和小に残っておられた木原平五郎先生が敵弾にたおれて死なれたという報せもききました。九月廿五日五ヶ月間お世話になった羽月の方達と別れを告げました。帰りは貨物列車でしたが、鹿児島町の町が見渡すかぎり焼け野原になっているのにびっくりしました。残っているのは照国神社の鳥居とコンクリートで建てられた家ののこりだけでした。今の松原小でしょうか、そこで五日位船の便を待ちました。そして十月一日午前十時頃貨物船日東丸で全員無事帰り着きました。もし戦争が二・三日つづいて居たら種子島も全めつだったかもと父は教えてくれました。

私は今も疎開に行った時の事を子供達に話したりしますが、知らない他人の子供を我が子同様に育ててくださったご恩は決して忘れてはならないと思ひ、行く末長くお世話になった事を子孫に伝え、交流を深めて行きたいものだと思うのです。今年創立百周年に当たりますが、当時太平洋戦争

で多くの現和の若い人達が国の為に散って行った事を思う時二度とあゝした戦争が起こらないよう願ひ度いものです。

『戦後七〇年学童疎開記念誌 つなぐー語り継ぎたい想ひー』には、折口キクエ氏による「数え歌」が掲載されている。

当時現和小学校の六年生だった折口氏は、疎開先から種子島へ帰ってきた後、何度も友達と次の数え歌を歌っていたという

(傍線補注)。

一つとせ 人の知らない伊佐郡に、所はならがき羽月村
二つとせ 二親離れてきたからは、五か月たたなきや帰られぬ

三つとせ 皆さん私の腕を見て、哀れな疎開者見ておくれ
四つとせ 夜は九時半寝かされて、朝は五時半起こされる
五つとせ いつも班長さんが見て廻る、仕事をしなければ叱られる

六つとせ 向こうに見えるは種子島、早く帰りたいふるさとへ

七つとせ 何度も何度も見に行くは、哀れな疎開者と見ておくれ

(サイトとの誤解か)

八つとせ 山の中育ちの私でも、水稲のぞうしい (雑炊) 食べられぬ

九つとせ ここで私が死んだなら、故郷の親は泣き暮らしたつとせ とうとう五か月経ちました

皆さん、さようなら、ごきげんよう

第七節 人物

孝子弥五郎とその娘袈裟

現和には、孝子と呼ばれた弥五郎とその娘袈裟という人物がいた。弥五郎は母親に孝養を尽くし、娘袈裟も父に劣らず親孝子者だったといわれる。弥五郎は、宝永五年（一七〇八）に庄司浦に生まれた。その親孝行ぶりが邑（島）主や藩主に伝わり、親子共々褒美を賜っており、『種子島家譜』には次のように記されている。

○明和五年戊子正月十一日 重豪（二十五代藩主）現和庄司浦の弥五郎と娘袈裟とが老母に孝なるを称して米各々三石を賜ふ。

○安永九年庚子三月二十九日 現和村庄司浦弥五郎宅地の税を除き之を旌表して孝行屋敷と称す。先に弥五郎孝あるをもつて褒章するあり今また此に及ぶ。

○寛政二年庚戌八月四日 太守公 庄司浦弥五郎の女袈裟錢三百正を賜ふ。袈裟は祖母に事へて孝あると聞かれ共に米を賜ふ。

弥五郎神社の石碑には、弥五郎の母親への孝行について次のように刻まれている。

夙に父を喪い、独り母と居れり。天資誠実、昼夜懈らず、孝養至らざるはなく、時に孤舟に棹して魚蝦を漁り、又田

野に耕して米穀を収め、以て其の食を給せり。夏は枕頭を扇ぎて涼を送り、冬は自ら失づ被を暖めて後寝しめ、又常に炬火を盛んにして冒感の憂ひなからしむ。世称して弥五郎焚きと云う。斯の如きこと四十年、一日も怠ることなし。

また、娘の袈裟は、生家から四キロ近く離れた田之脇の脇田家に嫁いでも、村人の評判になるほどの孝行ぶりであった。袈裟は朝まだ夜が明けないうちに父のため水を汲みに行き、朝の手伝いをして帰った。帰る途中で馬の草を切つて帰り、それから自宅の炊事に取り掛かったという。袈裟の噂は島の役人から島主の耳に入り、褒美の品や金子と巻物を賜つたということである。

○弥五郎の娘袈裟の嫁ぎ先に伝わる巻物の一部

右膳殿ヨリ相渡サレ候御書付ノ寫

青銅三百正

種子島現和村之内

庄司浦亡弥五郎

娘 け さ

右者祖母へ孝養致シ候段聞コシ召シ通サレ御褒美

ヲモ仰セ付ケ置カレシ故御覽遊バサル可キノ處

婦人故御覽ノ格ヲ以テ右之通頂戴仰セ付ラレ候

条 有リ難ク承知奉ラス可ク候

右之通り夫又ハ親兄弟ノ内主人宅へ召シ呼ビ申シ

渡ス可キ旨申シ渡ス可ク候



現和小学校にある孝子弥五郎の碑

八月四日 右 膳(人名)

庄司浦亡弥五郎娘 袈裟

弥五郎は、種子島島主に対する恩義にも厚く、現和小学校にある石碑に次のように刻まれている。

邦人其の孝に感じ、皆、師父として之を視る。而して弥五郎、謙抑みずから居らざるなり。常て人に謂つて曰く、小人、芳を刈りて蓬を編み、以て自活するを得るものは邑主の恩なりと。因つて毎歳二十疋を献せんと、状を具して以て聞す。

この石碑は、現和小学校校長浜田盛一が青年会員や婦人会員などと協力し、子弟の手本とすることを意図して建立されたものである。弥五郎は、「今

日もつ、じの花に、蝶ちよが何ひき(羽)来たか、帰つたら教えてな。」と、老母に言つて仕事に出かけたという。

天明二年(一七八二)に平信友という国学者が、弥五郎の茅屋に「定省庵」という額と二、三の文書を持つて杯を交わした際、このようなエピソードを聞いて感動し、詠んだという和歌が、「定省庵詩歌集」に残されている。

て感動し、詠んだという和歌が、「定省庵詩歌集」に残されている。

蜚人の誠と、めてわれも今数かく文字や世々に伝へん

こころざし猶染め添えて
たらちねに見せしつ、じの

はなそ色濃き

木原惣四郎現和区長(校歌に唄われた松林の植林)

『現和郷土誌』によると、字東泉原は、現和中学校ができる前は松林であった。現和区は是を売却して多大な利益を挙げ、旧制種子島中学校創立基金その他に使用した。跡地は荒れ果てていた。昭和三年(一九二八)区長木原惣四郎氏が就任するやこれを見て、松の植林を行った。その後学制改革によって昭和二十二年中学校がこの地に敷地を決定し校舎を建てて、残りの松の木が現在のように成長したのである。

区民の予期しない間に一人の考えで苗木千本を購入し、上之町集落民とともに植樹した彼の特種の堅気が手伝っていたが、勇気ある行動は大いに誉められるべきである。学校防風林、学

校風致林、中学校生徒公園に利用されている。

木原平五郎
小学校の正門近くに、昭和二十年六月十六日に米グラマン機

の襲撃により逝去された先生の顕彰碑がある。大東亜戦争時の空襲で生徒を学校近くの防空壕に避難させて最後に壕に入ろうとした時大腿部に玉が貫通して重症を負って亡くなられたのである。

先生は、在職二九年中、二七年間を現和小学校に奉職し、生徒から慕われ、現在も当時の生徒たちの心に生き続けている。

鮫島助吉

文久二年（一八六二）一月十日、現和上之町に生まれる。区の有志として活躍し、区長に当選。教育熱心で、息子二人は医学校に入ったが、その後次男は死去。長男宗雅氏は鹿児島市東千石町で肛門科医院を開業した。助吉は昭和十一年四月、小学校に奉安殿を寄贈（一〇〇〇円）し、現和の子弟教育に多大の貢献をなした。鮫島助吉翁の人柄を偲ぶものとして、『現和郷土誌』に掲載されている子息宗雅氏から下園甚五郎氏宛の手紙を引用する。

（前略）先日お約束申しました助吉の履歴については何も証拠書類がありませんので只、父がつねづね云って聞かせて居た私の記憶をたどって書いて見ます。鮫島助吉（通称 宇助）

文久二年正月十日生、昭和九年十一月十六日亡。父は五才（慶応二年）父を失い、母に育てられ、八才にして寺小屋に通い、十二才（島内から三人選ばれて）島主の幼児、

守時様の御守役として上鹿、下竜尾町のお屋敷に住し守時様のお勉強のお相手をする。

明治十年従軍を申し出たが殿様から「お前は母一人だから帰島して母に孝養をつくせ」とさとされ帰った。

帰ってから、「小学校教諭に任じ八文を給す」と辞令をもらった。（私が医学生時代古い書類の中から見付け出したが整理の時、その辞令を焼いてしまった。）

其の後現和区の全体の測量の事に働き詳細に調査した後農業に打込み「人並に働いては人並以下にしかなれぬ。人並以上に働け」といって暗い中に起き馬草を刈って帰って来る時、村の人達がやっと戸を開けて居た。この状態がいつまでも続いた。又農業は頭でせねばいかんといって常に稲の直蒔から苗代への改革、バラ植えから縄引き植えへの改良、砂糖きびの良種の導入（私の小学校低学年の頃、垂水、伊関方面から）落花生は花岡村（今の鹿屋市）から持ち帰り、前の畑（今の小学校の敷地）に植えて良成績で、それを翌年は、もと屋敷、東の園、西大西、東大西等々広く栽培し（鳥がほじくるので昔の種子鳥銃を鳥おどしに畑に備えつけて置いたのを三丁も盗まれたこともありましたが）桑を植えて養蚕をやり、夏はナガラメを買ってメイホウを製造し、支那輸出の助けにしました。私も学校から帰ってから馬をひいて、赤瀬、畑尻、かづら瀬等によく行きました。父は多角経営をやって居ました。公職として農事組合

長、衛生組長、学事組長、糖業組長、現和区長、北種子村
 会議員、等々をやつて居りましたが、証するものは何も残つ
 ておりませんが森彦（小山田）さん、時秋（榎本）さん、
 武部の木原惣四郎さん等知つて居られると存じます。父
 はこれからは百姓でも漁業でも大工でも皆学問が必要だと
 いつも云つていました、それで私を遊学させてくれたので
 しょう。その裏には、母が一生懸命父にすすめてくれたの
 でしょう。思えば次々に父の姿が現われて来ますが以上書
 いたことは郷土史には余り必要のない事でしょうが只、父
 は偉かつたと頭をさげ写真を神棚に上げて毎日拜んでおる
 のです。（後略）

向田紋太

武部の向田神社の祭神として祀られる向田紋太は、武部老人
 クラブ発行の「ふるさとの記述」によると、次のような人物で
 ある。

宗次・新八・紋太・彦兵衛

○宗次有故留滞江府学射術、依松平対島守之招為家臣、師
 星野勘左工門之門弟太田重右衛門興親、学射術有年于此。

○元禄三年三月十三日、放肩様箭数一万三千筋依有元禄三
 年七月六日之免状。

○宗次 為対馬守主之火消奉行。

○宗次 有故辞対馬守主之家臣下向手種子島。

○享保十五年 依西村甚七時員吹拳蒙久基公之恩免列士林
 是依射芸也。

○寛保元年辛酉十二月九日死去享年七十九 法名 隆逕

口碑二曰ク、紋太先生^元赤尾木ニ居シ、後現和武部ニ中
 宿シテ死去。同地ニ葬ル。子孫本村ニ移リテ今ニ至ルト。

紋太先生の先祖

平姓ナリ。向田平右衛門宗久、天正四年ノ頃、三国及諸
 擾乱而一同不穩故去薩州向田下向於種子島為家臣。

寛文二年（一六六二）赤尾木に生まる。長じて江戸に出て
 射術を学び、松平対馬守の家臣となる。

元禄三年（一六九〇）二十八才。射術の免状をうく。松平
 対馬守の火消奉行となる。後、辞して種子島に帰る。

宝永三年（一七〇六）三十五才。西村甚七時員に遠矢を指
 南す。時員、四町三反三間一尺五寸を射通す。この石碑が
 南種子町西之本村に現存する。

享保十五年（一七三〇）六十八才。久基公の恩免を蒙り、
 士林に列し、射を芸とす。

祖先向田平右衛門宗久は、天正四年、戦乱をさけて郷里
 薩州向田を去つて、種子島氏の家臣となつた。天生から紋
 太先生誕生の寛文二年までは、凡そ百年の歳月が経ってい
 るから、紋太先生はおそらく、宗久氏の三代か四代目の子
 孫であろう。紋太先生がいつごろ武部に中宿したかは不明
 であるが、壮年時代は赤尾木に居住して活躍したであろう



庄司浦の船祝い
 (下野敏見編『西之表市の民俗・民具』第一集より)

われるが、あるいは下向の途中、
 京都に寄り、三十三間堂
 で射たかもしれない。

第八節 年中行事

から、中宿したのは、

おそらく晩年ではある

まいか。宅地跡は、字

小川谷（横野）七三一

二番地。弓場跡は同じ

く七三二三番地であ

る。

口碑は、京都で修業

し、三十三間堂を射通

したと伝えているが、

系譜は、江戸で射術を

学んだと実証してい

る。これが正しいと思

元 旦
 一 月

○若水迎…若水を汲み、それでお湯を沸かして神棚に上げてから、一家揃って元旦を祝う。海の近くでは朝早く海水を汲み、家の周囲にまいて清める。

○拝賀式

○歯固め餅…朝早く起きて、餅を焼いて歯固め歯固めと言って食べる。

二 日

○船祝い

三 日

○白起し…お餅をついた後の白を洗い、米や祝い物を供えてお祝いをする。各家を回って祝う所もある。

○勧学祭（風本神社）

七 日

○七草祝い

○福祭文（クサイモン）

○オビトキ…数え七歳になった男女の子どもの成長を祝う行事である。各家庭では、子どもが七歳になると、知り合いに「オビトキの親」を依頼する。オビトキの親は、男の子

の場合は父親の近親者である祖父母、伯父・叔父・伯母・叔母の中から、夫婦健在の一組を選んで依頼する。そのよ

うな適当な人がいない場合は、それに代わる交わりの深い人に頼む。この場合、その子が「養い親」（庄司浦では方

親ともいう）を立てていたら、オビトキの親も「養い親」になるのが通例である。親に頼まれたら、男の子の場合、

緋の着物上下、スゴキの帯、足袋を買う。その着物には、結び付けヒモを仮縫い程度に縫いつけておく。女の

子用は振り袖や合わせの着物が普通であったが、昭和時代には入学祝を兼ねて、洋服類を贈った。この場合は、着物

は有り合わせのものを使ってオビトキの祝いを済ませる。女の子の場合は、ほかにタイコ帯、履物、髪飾りなども用

意した。一月七日の夕方、風本神社や集落の神社に参拝して成長したお礼とおビトキの報告をする。オビトキの具体的な進め方については、各集落で異なっていたようである。

十一日

○歛入れ・ウラジロやユズリハ、餅等を供えて作の神を祀る。田の神を祀るともいわれる。

十四日

○コノミヤ（蚕宮）ジヨウ（作祝い）

十五日

○破魔祈祷

二月

三日

○節分

三月

三日

○桃の節句（雛祭り）

十五日

○世間願立て・病気にならないよう、また怪我や過ちもなく

無事に過ごしていけるように氏神様にお祈りする。

二十八日

○風本神社春の大祭・第四土曜日に開催する。前日夜はお通夜で、翌日各集落春の祭りとなる（願立て）。

五月

五日

○端午の節句（こどもの日）

六月

○風本神社六月堂

○各集落神社六月堂

七 月

七 日

○七夕祭り

二 七 日

○敬老祝い

○世間願立てに立てた願ほどきを行う

八 月 (旧歴では七月)

十 月

一 日

○朔日…精霊様が墓地を出発する日。

二 十 八 日

十 二 日

○墓清掃、線香立。

○風本神社秋の大祭…第四土曜日に開催する。前日夜はお通夜で、大祭の翌日秋の祭りを行う(各集落願成就)。

十 三 日

○御器洗い…お供え用の食器を洗い清め、迎える準備をする。

十 一 月

十 四 日

○精霊迎え…朝早くお迎えをし、お供えをする。

三 日

○文化の日

十 五 日

○精霊送り…前実の夕方から翌朝にかけて、精霊様を送る。

十 二 月

十 六 日

○精進あけ

三 十 一 日

○大晦日

九 月

十 三 日

○十三夜

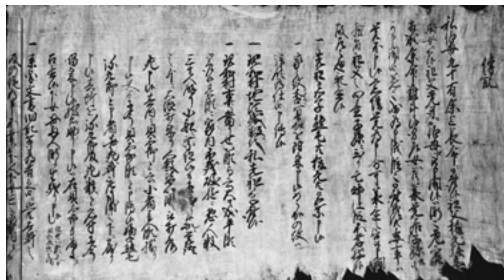
十 五 日

○十五夜

せい瀬伝説

田之脇から庄司浦に向かう途中の沖に平らな瀬がある。陸から数百メートルの距離にある瀬で、現在ではほとんど渡る人はいない。この瀬には、現和上之町の榎本家の系図とともに伝わる遺言がある。その中のせい瀬に関する部分の概要は次のようなものである。

現和村、東にせい瀬という大きな瀬がございます。その瀬に家内残らず磯遊びに行き総人数三十人余り子船に乗り



榎本家に伝わる遺言（伝記）



せい瀬をのぞむ

組んで渡りましたところ、覚悟の外大波が来て皆海に落ち死にました。その中、貝太郎という者が一人瀬に上りました。それから今に貝太郎瀬と申し伝えるようになりました。嫡子の熊毛弥九郎と申す者の死体は庄司浦の下に寄りました。そこを弥九郎殿死体と名乗り今に伝わってきています。右の貝太郎と留守に置いた下女が生き残りました様な次第です。

せい瀬は、それより現和村殿瀬とも言われ、貝太郎瀬、榎本瀬、弥九郎瀬ともいわれる。また、榎本氏一族が行けば凶事があるとも伝えられている。

これは、榎本権右工門貞則という人が、祖父強兵衛の遺言を書いたもので、遺言の中には、「先祖の事、熊毛入道と申し伝え候、年間・時代・来歴を知らず」とある。

堂月の峯（道月の峯）

本村から武部へ行く途中の瀬粉工場跡地の西の田の中にある丘をドウゲツの峯という。『西之表市の伝説』によると、かつてここには、城があった跡らしい三連閣の跡が残っていたという。古墳ではないかと言う人も



堂（道）月の峯

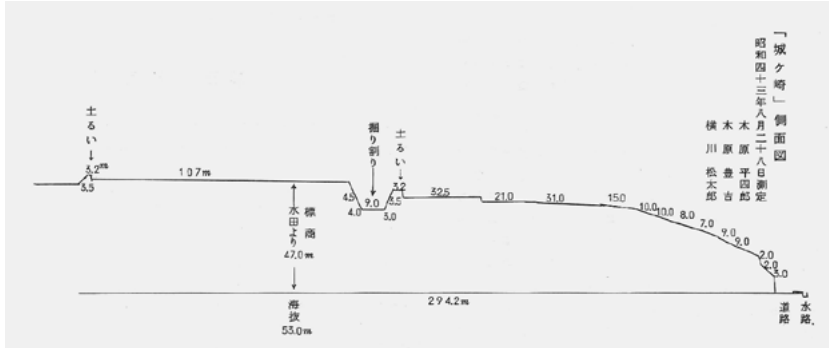


図8-18 堂月の峯側面図（武部老人クラブ発行『ふるさと』より）

いる。

また、『現和郷土誌』によると、堂月の峯のある字城ヶ崎には人工的な掘り割などがあり、現和氏の砦の跡ではないかといわれている。武部とはおそらく山続きでだったと思われる。

武部老人クラブ発行の『ふるさと』で次のように紹介している。

俗にいう道月の峯には、城ヶ崎、西道月、北道月の三つの小字がある。上之町から田浦に出て、六反の橋を通り「カッタの口」（湊川）を渡って、道月に登り、西に縦断して「野佐野和」「檜の木」等に通じる道路があり、往古は幹線道路であったというこの道路の北側が「北道月」、南側の東半分が「城ヶ崎」西半分が「西道月」である。城ヶ崎には図

(図8-18)でみるように人工の掘り割りや築きまわした土の跡もあって、ただの場所でないことは充分確認出来る。古くから現和氏の城跡だと伝えているが、りっぱな館をかまえるような城ではあるまい。

築城の術を知らない時代であるから、そのような城として住んだのではなく、緩急ある場合ここによって戦うという楠公の千早城のような、いわゆる山砦の跡であり、一種の山城ではないかと思う。種子島氏入島以前のとりでで、鎌倉時代、もしくは平安時代にさかのぼる旧跡ではあるまいか。標高は海拔五三米、水田から四七米で、掘り割りの東側は西側より五米低い。

経塚

本源寺蔵書の現和村隆興寺の項に、聖主院という坊の記録があるが、江戸時代の寺院整理によって廃寺になったものである。武部集落の下村に山ン寺といわれる地名が残るが、聖主院がそこにあったものと思われる。

山ン寺は、江戸時代の



武部の経塚跡

文化年間に廃寺となり、明治時代の廃仏毀釈まで山ノ寺と呼ばれており、明治時代には豊受神社として祀られたものと思われる。

山ノ寺の御経と信者の数珠を埋めたといわれているのが経塚である。木原平十氏の話によると、山ノ寺の信者の家には、代々数珠が伝わっている家もあるという。経塚は、武部製鉄所跡の上の山中にある。

湯 穴

自然の洞窟になっていて、入り口の上からはいつも水滴が流れ落ちていく一種の蒸風風呂である。現在の自然サウナ風呂のようなものであるが、現和では、武部と屋仁吾にあり、西之表の士族たちも湯治にやって来たといわれている。穴の中に火を焚き、地面にイカダを組んだ上に裸で寝て汗を出す蒸し風呂で、海の瀬風呂に相当する。昔の民間治療法の一つで各階層に相当利用されたということである。

瀬 風 呂

浅川海岸・田之脇海岸・庄司浦海岸の磯のくぼ地にあった。いつからこれが始まったのか不明である。

田之脇に数カ所、庄司浦に二、三カ所、浅川にもその跡が残っていたというが、ほとんど埋もれたか壊されたかで現在は見られない。薪を持ち寄って、瀬風呂の近くで石を焼き、焼けた石

を塩水の中に入れて温め、適温にして入浴するのである。瀬風呂に入る

のは、大体農繁期が過ぎた六・七月頃が多く、ほかの集落からも、定期的に通ってくる人もいたという。神経痛、リュウマチ、切傷や子どものおでき等に効能があったようである。石の中に含まれている鉄分と塩分の作用で温泉と同じ効能があったのだろうか。『種子島家譜』には、「瀬潮」という表現が用いられている。

現和の五橋

現在、現和には橋もたくさん架けられているが、旧藩時代の現和には橋は五つしかなかったという。藩政時代は、橋を架けるにも領主の許可が必要で、橋は自由に架けられなかったようである。

橋を架けたり架け替えたりするときには、現和中の人が総出で橋になる木を山から引いて皆で架けたようである。

五橋は、村の役人たちの出入りに都合の良い場所に優先して



古い瀬風呂近くの潮溜まり



田上七之助翁顕彰碑

架けられたため、村人が遠回りをしなければならぬ地区もあったようだ。

五橋の一つは川氏の田代橋で、現在の田代橋と同じ位置である。この橋は、住民が城下へ出たり、城下から現和に入ったりのために必要な橋であった。

二つ目の橋は、やはり川氏にあった水無川に架かっていた橋である。この橋は、川氏から西俣に行ったり、現和の中心部に行くのに必要な場所にあったが、現在この橋はない。この橋は田代川に近いうえに川幅も狭いので、田代橋の架け替えの日に、田代橋の古材をそのまま使って架けた。

三つ目は、上之町から安納に通じるスタワタゼの橋である。ここは、川というより田の畦あぜを流れる狭い溝川であった。現在は道路の下に暗渠を通して水を流している。

四つ目は、現和田浦の六反の橋であり、この橋は現和の中心部から武部集落、浅川集落に通じる湊川に架かっていた。

五つ目は、下之町から風本神社に通じる途中に当たる舟田口の橋で、湊川には浅川の人たちが田之脇や現和の中心部に行く橋はなく不便であった。



昭和4年頃の奉安殿 (小山田幸夫氏提供)

明治になって橋が自由に架けられるようになってから、西俣の大聖寺橋・西俣橋・近政橋・武部の湊川橋・浅川の田上橋(風本橋)などが架けられた。

風本神社の前にある田上七之助の顕彰碑は、現在の風本橋ができる前に七之助のご好意により架けられた橋である。



現和の庄屋文書 (榎本千明氏提供)

風本神社

祭神は志那津比古神（別名天御柱神）志那津比売神（別名国御柱神）。また、科戸辺神ともいわれる。年代は不詳で、和歌山の竜田神宮を勧請したものと伝えられている。

現和校区の氏神で、島内ではただ一つの全島民の海上安全を守る風の神様で、漁師や渡航者はここに参拝して航海の安全を祈る習わしがあった。



風本神社社殿

古くは風本明神とも言われたが、法華改宗の頃には風本勧限と呼ばれ、明治の廃仏の際に風本明神の旧号に復した。

『懷中島記』によると、「毎年六月十五日は風本権現祭が行われ、地元の老若男女が大勢集まり、的を射る催しが開かれた」とある。藩政時代から大祭には種子島家の名代も参拝に来た。

大祭は三月二十八日に豊年満作と平穩無事を祈願して奉納相撲、十月二十八日に願成就祭で郷土芸能奉納を校区民総出で行っていたが、平成以降は前後の土曜日に実施している。

神社前には慰霊碑が建立されている。左側は西南の役、真ん中は日露の戦役、右側は大東亜戦争の戦没者の慰霊碑である。大祭の日に合わせて、春と秋の二回、遺族と校区民が参列して慰霊祭を行っている。

風本神社は風の神であるが、なぜこの地にあるのだろうか。東西の風が荒い種子島では、湊川河口周辺が古代からの海上交通の東の要所であった。秋から冬の間は、東シナ海は時化が多く、赤尾木港に船を着けられないときは、風本浦（田之脇港）が利用されることもあった。

また、季節風を利用して航行する帆船の時代には、琉球等の南方や大隅・日向・豊前・豊後・筑前・瀬戸内海方面、関西・京都・熊野方面への渡航には東海岸が利用しやすい場所であり、湊川河口付近が頻繁に利用されていたのである。

上之町の北側に古風本という小字名があり、古くはそこに奉祀されており、その後、現在の湊川のほとりに遷座したといわれている。文久三年（一八六三）に、社殿の改築を行い、以後、明治・昭和の時代にも改築されている。

塩釜繁盛祈願の碑

文化八年辛未六月十五日

敬

白

南無妙法蓮華經

浅香町中

町内安全塩釜繁昌祈

日耀（花押）

種子島では、文化年間に寺院整理が行われた。「南無妙法蓮華經」の碑はその名残であろう。『南島偉功伝』『種子島家譜』『種子島家年中行事』『本源寺文書』に記録が残る。

近政の正八幡宮

昔から長田家にあつたものを集落氏神としたものである。その先祖親子三人が近政をたてたといわれ、三人の墓石が古い墓地にある。神社の境内には古い供養の石があり、正月には祭りを行つている。境内には牧神（馬頭観音）も祀つてある。かつては、境内に樹齢三〇〇年を超える老松が若々しく立っており、古い歴史を感じさせていた。祭日は集落行事として、三月に願立てを行い、十月に願成就の祭りを行う。社殿は近政公民館の西側、近政橋の近くにあり、奥には数基の石碑がある。石碑の文字は廃仏毀釈で削られたとみられ、「日親」の文字のみが残っている。

田上七之助氏開田の碑（川氏下村氏家前）

下村照夫氏宅の北側（小字現和ス）近くに、七之助が自然石



塩釜繁盛祈願の碑



近政の正八幡宮

をうろこ形に築いた石垣がある。これを通称七之助垣といつているが、この石垣は絶対に崩れない築き方といわれている。

七之助はこの垣根の上に別荘を建てて、開墾と保養を兼ねて居住した跡が残っている。



開田の碑

西俣集落の祭神とみ山

西俣集落の氏神様は三柱の神だといわれる。農の神として木花咲耶姫、集落の泰平安穏と疫病退散を祈る神として大山祇神、



西侯の大山神社



み山公園の桜



八幡様・園田神社



西侯の馬頭観音

西侯門左衛門の子息茂助を祀った八幡様である。

大山神社は、明治四十三年（一九一〇）に、国上の奥神社から分祀したものである。現在でも、一月十五日に破魔祈禱を行っているが、昔は、西侯氏祖先にあたる日高家も参拝していたという。み山の桜の言い伝えは現在にも語り継がれるほどである。西侯茂助が園田家を家来として神を祀り、桜の咲く頃に殿様や住民を招き、酌婦としてヒガ嬢を迎えて花見の宴が賑やかに催されたと伝えられており、西之表城下からも、武士たちが桜の花見に押し寄せるほどであった。

歌い継がれている西侯節には、当時の様子がよく表れている。

「ヒガ女マツ女来いとさえ言えば、道の四・五里どま朝の間に」

「花の西侯あくこたあないが、ひじり曲り坂あき果てた」

「ひじり曲り坂は昔のことよ、殿のおく召す坂や」

「花の西侯、入りはにや悪し、出はにやなごりのある村」
あまりにも頻繁に花見の客が来て西侯を荒らすので、桜を切り倒したといわれる。

馬頭観音は、西侯共有の牧場が小字内之中野・知伊勢・猪之氏にあったものを、現在の比良之小田に移したものである。現在は馬が飼育されていないが、肉牛の畜産組合が中心になって十月に祭りを行っている。

大聖寺

西侯には、大聖寺があった。その跡地は現在西侯集落の老人会が管理する竹林になっている。寺院の跡には、当時の痕跡だと思われる二石を超える石碑や大小の石塔が残されている。『現



大聖寺跡の石塔

和郷土誌』によると、かつては石塔群があり、その中に「梶原孝助寄進」の文字が刻まれていたというが、石碑の文字は削られている。

『種子島家譜』の寛政十年（一七九八）四月の項に「大聖寺は隆興寺塔頭」とあり、最初の頃は、隆興寺の子坊であったことがわかる。大聖寺の建物は、茅葺社壇（一間、四面）茅葺堂客殿（四間方）茅葺庫裏（二間、三間）であった。

台運院坊・中ノ坊・聖主院

台運院坊、中ノ坊はどこにあったかは不明だが、地元の人が院房と呼ぶ小字名とその近くに院坊ヶ谷と呼ばれる谷田がある

ことから、およその場所を推測することができる。

また、武部集落の公民館の近くに山ノ寺と呼ばれている場所があるが、山ノ寺は本源寺所蔵文書の中にある聖主院という寺で、藩政時代の寺院整理で廃寺になった寺ではないかと考えられている。

なお、種子島でも昔から数カ所の寺に詣でる習わしがあったとされることから、聖主院が一の寺、中ノ坊が二の寺、台運院坊が三の寺ではなかったかと推測する人もいる。

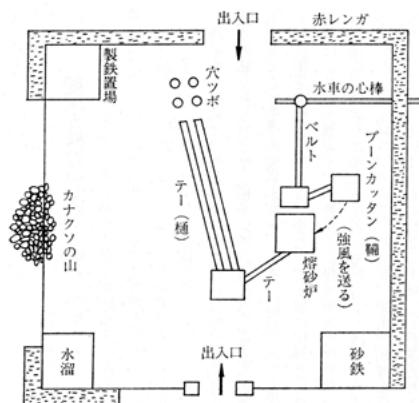
向田神社（弓矢八幡）

神社祭神向田紋太は、向田武彦の先祖であるといわれる。京都で弓の修行をして名人位を得、京都三十三動園堂を射通した人で、後に一族とともに現和の武部に移り住んだと伝えられている。

明治の初年頃に、集落に牛馬の病気が流行したので易者に尋ねたところ、向田紋太を神に祀ると良いということだったので、小さな祠を作って



向田神社



製鉄所見取図

祀ったところ病気はなくなったと伝えられる。明治四十二年に、一五坪の社を建て、落成に際して、種子島家から男爵種子島守時直筆の「向田神社」の社号を頂き額字にして掲げた。武部組合は、向田神社の社祭として、毎年正月十一日を期し、御的初めの式を行っていた。明治四十二年の神社改築当時は、現和の弓取りを一〇人ほど雇い、一時頃から社祭を開催していたという。祭りには、野間から向田甚哉、末助氏、伊関の向田紋吉氏も参詣している。なお、向田神社には、武部集落民が昭和末頃まで祭神としていた豊受神社と経塚が合祀されている。

製鉄所跡

『種子島家譜』に、「正徳三年五月、久基 鉄山師河辺の土春

田半左衛門、逆瀬助右衛門及び百姓三人を招いて鉄を現和村に鋳る。土人をして練習せしむ。八月六日五人帰る。」と記録されているが、この製鉄所跡は、武部の字牧田代に現存している。また「本炭氏系図」には、

元種子島三左工門、下人ニテ、炭焼ノ業伝授致シ、御用船御造リノ時ハ、炭ナラビニ鉄ヲ自ラ仕入レテ以テ一艘ムケ調ヘ仕リ、進上仕リ、其ノ功を賞シ、享和元年辛酉八月、蒙命、本炭ノ名字足輕ナラビニ定紋ヲ給フ。

と記されている。

このことから、少なくとも正徳三年（一七一三）から享和元年（一八〇二）までの八八年の間、製鉄が続いていたことがわかる。

また、官宮の八幡製鉄所ができたのが明治二十九年で、昭和三年（一九二八）頃までは、安城の鉄浜海岸の砂鉄を馬で古田小学校近くにあった製鉄所まで運んだということが、『現和郷土誌』に記されていることから、明治時代以降も続いていたのではないかと思われる。

さらに、本炭家には当時の窯の平面図が残っていること、フイゴの動力源が水車であったと伝えられていること、水車の黒糖製造小屋がほぼ同じ場所にあったこと、近くに「麻煮橋」があることなどから、この地域の先進性が見えてきそうである。

僧角文の碑

現和菅原神社の境内に、次のように刻まれた自然石の墓碑がある。

（表面）僧角文之碑

（裏面）明治三十二年一月十九日 吉平共立舎



僧角文の碑

この僧「角文」について、元現和中学校校長の林祐直氏が、『種子島家譜』を調べたところ、次の史実を確認することができた。

○天保四年（一八三三）九月十三日「横

目 伊集院治左エ

門、同心十三人、大

坂の流人十二人を護

送し来る。即ち之を

して配所の地に遣ら

しむ。（例の如し）」

○弘化二年（一八四五）八月六日「公儀の流人僧角文死す。

締方横目坂本吉左エ門、羽田孫助、吾が横目西村休八、

西村十左エ門之を検見して官に聞す。」

さらに、種子島時哲氏にお願いして調べていただいた所、次のことが明らかになった。

覚

一 禅宗 木村惣左エ門 代官所

河州 河内郡 白下村

正法寺隠居 角文

右預人 現和村庄屋

榎本七左エ門

僧角文は天保三年（一八三三）から弘化二年（一八四五）までの一二年間現和にいたことになる。また、神社に墓碑があることから、現在まで現和の人々の心の中に生き続けてきたことになる。僧角文が、村の子どもたちと交わりながらいろいろなことを教えるなど、村人にも大きな感化を与えたからではないかと考えられている。

隆興寺石塔群

庄司浦の境内には、隆興寺の塔頭（子坊）があり、大定院坊と号し、隆興寺の草創であるといわれる。

大定院日高が隆興寺の一坊を建てたのがその始まりで、日新と日高が開いた田地が、現在の風本神社の西の内之堂にあり隆興寺の田地であった。現在は、庄司浦集落が管理している。

創草年代は不

詳。大会寺末寺、

寺領二石である。

隆興寺の建物は茅

葺社壇（二間、四

面）茅葺堂客殿

（三間、四面）茅

葺庫裏（三間、二

間三尺）とある。



隆興寺の石碑群



平草漁創始者顕彰碑

翌四十三年、宮崎県人の二宮兵吉氏と共同にて事業を開始し、地元庄司浦・田之脇・浅川各組合員が従事した。日当は四五銭から五〇銭。その後、浦田・湊組合、郡外は佐多村方面から来た。曳航船に動力船を廻航し、操業盛んであったが、数年にして中止。下川氏は内地に引揚げ、二宮氏は本島に残り操業を継続した。昭和初期、庄司浦・安納両組合専用漁業権を取得し、市内同業者が従事していたが、昭和二十六年東海地区組合の合併によ

平草操業の始まり

『現和郷土誌』によると、明治四十二年、大分県人鉦山技師の下川清彦氏が来島。宮崎県、和歌山県にある平草が地理的暖流の関係上、自生帯が本島沖まで延びている事を推定し、鹿児島市加治屋町の上床新助氏（当時鹿児島商業学校教師）の紹介にて、安納に来た。喜十郎の案内で庄司浦船主黒田甚次郎を水先人としほかに六人を雇い、下川氏もともに乗り組み、庄司浦・安納沖合約二キロメートルの漁場にて採草し、平草が自生していることを確認した。

り、新たに発足した東海海漁業協同組合がこれを管理した。

菅原神社（天神様）

中種子町坂井出身の田之上龍三氏が隆興寺僧として就任中、明治初年仏教廃止によって僧の職を失い、有志と寺院跡に菅原神社の分室を建立し、田之上氏を宮司に転職させたことが始まりである。

明治四十年小学校校庭の拡張、校舎増築が開始され、この神社を西方高台の字仮屋園六二七番地に、現和校区からの費用をあてて移転修繕し、上之町・下之町の氏神様として与えられたものであり、現在まで神社を管理し、祭典、遊園地に利用している。

現和小学校の西の天神様は明治になって以前からあった隆興寺を壊した代わりに建てた神社である。

天神様は元は鮫島・榎本・羽生三家の守り神であったという。

種子島落花生栽培初地の碑
『現和郷土誌』によると、
医師最上宏氏は、大正三年



菅原神社（天神様）



落花生栽培初地の碑

がなく、米作・麦作の肥料購入資金もないという窮状であった。最上氏はこの現状を見て、その対策として瘠せ地を好適当地とし、収穫後はその土地を肥地とする豆科植物、かつ換金作物である落花生に着眼し、一挙両得のこの栽培を考出したのであった。

種子代は現金で取らず、十月の生産物から各区民の栽培種子量の倍の量を返させたので、その年の十月には、中村氏（種子の手配をした西之表の穀物商）には、三五石の倍量七〇石を完済し得た。

（一九一四）春、村内

第一、農地広大な現和校区を選んで農園を開いた。当時、現和全域にわたり腸チフスが流行し、約百名余の罹病者を出し、困窮した農家を益々苦難のどん底に落とし込み、言語に絶する惨状を極めていた。農家ではさとう

きび作以外に換金作物

仮屋元吉平

『現和郷土誌』によると、藩政時代に島主が、島内巡視のため宿泊所を現和村に作らせた。当時、種子島東海岸各村では珍しいほどの美しい建て家屋で、至極島主の御気に入りの宿泊所であったと伝わる。現在の区長事務所を仮屋といった。

巡視のみでなく、釣りに、狩りに、遊楽のための仮屋

利用が多かったという。時の庄屋は仮屋主としてあらゆる犠牲を払い、殿様のもてなしに努めた。

包丁人から酌取り美女を村内から選び出し、御機嫌取りに努めた。又、村の若い女衆も御前出仕することを一生の誉れと信じ、又、村人も評判を高くしたものであった。

仮屋表座敷には、殿様以外の者は絶対泊まることはできなかった。幽霊が出てきて、明け方には奥の間に移されていたからである。明治元年以降は、地頭、大区制・戸長制区長、区长使丁住み込みで宿屋主となり、行政に関する者のみに利用されたもので、明治二十四年北種子村政を通じ大正末期まで、事務所兼宿屋として利用された。



仮屋跡（現和区長事務所）



浅川エビス神社



浅浪神社



浅川公民館前の馬頭観音



塩焼元祖の碑

浅川集落の祭神

浅川集落の氏神は浅浪神社に祀られている。御神体は丸い自然石で、拝殿の奥の上の祠にある。この神様は塩焚きの神様で、

すなわちあまてらしますのおみかみ天照坐皇大御神武御魂、塩神、さみつひめみこと佐見都日女命である。風本神社の祭礼の翌日（十月二十九日）に浅浪神社の祭りも行う。

この神社の鳥居の前には、「浅川塩焼元祖の碑」が建立されている。集落では三社を祝う日として磯遊びを行う。集落の中央の砂丘付近をアケノブと呼ぶ。そこには昔豊年を祈念し、祝って建てた供養の石が何本も建っていたが、現在はその中の一つを公民館に移して祀っている。一月十五日には、集落の厄払いとして破魔祈禱を行っていた。集落の南の外れに、昭和の中期まで澱粉工場があった。その近くを「シオババ」といい、塩窯があった。

集落から二キロ離れた「オビラ」といわれる所に、松の大木があつて、牧の神を祀っていた。その数百メートル南にシオズリ竿という場所がある。ズリとは山から木を落とす所をいうが、種子島公が特に製塩用薪の確保のために与えた山だといわれる。牧の神を祀る馬頭観音は、公民館に移されている。浅川の発展を支えてきた塩屋牧の名残でもある。なお、浅川塩屋の元祖は大八郎という安城川脇の人であつたという。

田之脇港記念碑文

奈良時代の初め頃多禰国が創設され、熊毛・能満・益救三郡が置かれた。奈良時代の末である宝亀元年（七七〇）には、中臣習宜阿曾麻呂が多禰島守となり、三年後には、大隅守に転任



田之脇港記念碑

している。

田之脇港にある碑文には阿曾麻呂の名前が見られ、この港から上陸したとされる。港近くには浅丸（住民はアサマロとも呼ぶ）の小字名も

残されている。

明治十年二月七日には季節風が吹き荒れ、軍艦「寧静」は、西之表港に着くことができず田之脇港に入港した。三八六人の私学校徒が翌午前五時に鹿児島港に向け出征している。出征した生徒のうち一〇八人は再び種子島の土を踏むことなく散華した。

東町の玉川神社には、慰霊の碑がある。ちなみに、このときの種子島私学校生徒輸送船の水先案内人は庄司浦の黒田安次郎氏である。鹿児島琉球間を運航する大船の船頭を務めていた人物で、その功により、黒田の姓と短刀一振りを桐野利秋から与えられたと伝わる。

第一節 郷土芸能

現和校区には多くの郷土芸能が現在まで伝承されている。ここでは代表して県指定文化財となっている「種子島大踊」を紹介する。

種子島大踊（県指定文化財）

種子島大踊は、武部掛け打ち大鼓ともいわれる。鎌倉から伝わったとする説や、室町時代に種子島公がたびたび京都に行つた際に関西地方の踊りを家来たちに習わせて種子島に伝えられたものともいわれている。

下野敏見著『種子島民俗芸能集』によると、種子島の大踊は、百姓踊（太鼓を両バチで打つ）と武士踊（太鼓を片バチで打つ）の二通りに大別できるが、武部の大踊は百姓踊の系統を踏まえている。しかし、武士踊の姿も見られ、むしろ大踊が二つに分化する以前の古い姿をとどめている。大踊は一つの踊りが、出端、



種子島大踊



鎌踊 (田之脇)



棒踊 (田之脇)



ヨンシー踊



ヤートセー (清佐口説き) (西俣)



なぎなた踊 (下之町)



虚無僧踊 (上之町)



銭太鼓 (川氏)



兵児踊 (西俣)

本踊り、崩し、引端からなっているが、武部の大踊は八つの踊りがあるので、合計三三通りの踊りからなる。出水の種子島楽(鹿児島県無形文化財)は、享保年間に種子島栖林久基(島津家家老)が出水の五万石掘りの指導をした際に種子島から伝えられたものといわれている。

第二節 年 表

和暦(西暦)	現和校区のできごと
慶長年間 (一五九六～一六二六)	「慶長高帳」に吉平村名あり。九郎兵衛尉、源兵衛尉羽生久左衛門、彦四郎の名もあつた
慶長5年 (一六〇〇)	関ヶ原の戦い。この頃から、肥後氏の家臣である西村氏が現和村を治める
慶長11年 (一六〇六)	十二月二日、種子島弾右衛門時定、現和村で自害する
寛永年間 (一六二四～一六四四)	正月に国上村・現和村が、海産物を献上することが始まる
寛永元年 (一六二四)	羽生半右衛門能賢現和村地頭職(安城村地頭から)に就任
寛永5年 (一六二八)	阿久根千代女が、庄司浦の漁夫今之丞の船に坊之津から便乗して来島する
寛永14年 (一六三七)	安城・現和に雹(ひょう)が降る。田畑に被害が出る
元禄10年 (一六九七)	吉平越右工門、鮫島二郎右工門、家財を没収して南種子に寺領する
宝永4年 (一七〇七)	地震、潮水大いに溢れる(津波か)。現和村 庄司浦人家一〇軒流失
正徳3年 (一七一三)	久基、鉄山師河辺の土春田半左工門、逆瀬助右工門及び百姓三人を招いて、現和村で鑄鉄を行う
享保3年 (一七一八)	初狩り(奉行西俣庄右工門、西村五右工門の名見える。名代家老不詳)

和暦(西暦)	現和校区のできごと
元文3年頃 (一七三八)	浅川の塩釜ができる
延享3年頃 (一七四六)	種子島家老西村甚七氏が小山田善四郎氏宅を中宿とし、駒駆浦よりイデを通して平田浦を拓く
延享4年 (一七四七)	現和村保正禁固七日。三月、浅川塩屋の茂左工門、沖永良部島に流される
明和元年 (一七六四)	現和庄司浦の弥五郎、娘袈裟とともに親孝行を賞され、米各々三石をもらう
明和5年 (一七六八)	重豪現和村庄司浦の弥五郎と娘袈裟とが親孝行であることを賞して米各々三石を与える
安永2年頃 (一七七三)	現和で寺小屋教育始まる
安永9年頃 (一七八〇)	現和村庄司浦弥五郎宅地の税を免除し、孝行屋敷と称する
天明7年 (一七八七)	白雉を現和村に放つ
寛政3年 (一七九二)	現和村鮫島善太右工門を郷士とする
文化5年 (一八〇八)	熊野浦の孫平、休六五郎次など僧侶智円坊とともに庄司浦を出港して漂流し、大島の宇計に漂着する。唐船、竹崎に漂着し、庄司浦に至る。庄司浦を出港して浦田に着く
文化7年頃 (一八一〇)	武部の聖主院(山ノ寺)廃寺
文化8年 (一八一二)	現和村足軽鮫島与平次、田之脇の金七、太左工門、庄司浦の中右工門、新蔵、ガジュツを売り、科炭の罰を受ける

和暦(西暦)	現和校区のできごと
文化9年 (一八一二)	測量者、伊能忠敬来る。五月八日現和村田之脇に至り、池田より田之脇の汀に至るまで二里一五丁一間を測量する
文化11年 (一八一四)	現和村の嘉右工門、出右工門、喜与八、新四郎、市太、三左工門、三之允、市蔵を賞する。天文者の旅舎を修繕し、測量の丁夫として勤労したことによる
文化12年 (一八一五)	昇完院を大会寺兼隆興寺の住職とする
文化13年 (一八一六)	現和村足軽羽生浅之進を代々郷士とする
文化14年 (一八一七)	現和村村吏を叱る。無断で瓦を葺いた罪による
文政12年 (一八二九)	庄司浦の利三次・三吉・孫市、田之脇の孫蔵・作次郎・周吉に米二苞を与える。船の保護に努めたことを賞するもの
天保4年 (一八三三)	洪水、安城村・現和村・納官村、田地に被害あり
天保7年 (一八三六)	現和村郷士作見舞役の遠藤惣之允が、甘藷の苗を植えさせる
天保11年 (一八四〇)	横目伊集院治左工門、同心一三人、大坂の流人一二人(含僧角文)を護送し、来島する
天保12年 (一八四二)	足軽鮫島周右工門を郷士とする
	現和村足軽小山田甚五左工門を代々郷士とする
	十二月十三日現和村田之脇の人々が芝居をして叱られる。庄官小山田九賀右工門、横目鮫島周之允、羽生市郎、鮫島休次も叱られる

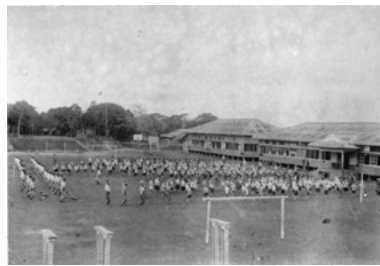
		和暦(西暦)
明治	10年(一八七七) 田之脇港から、総員四三九人が西南の役に軍艦寧静で出征する	現和校区の(でかい)つ
		天保13年(一八四二) 庄司浦の弥次郎、安次郎、新吉、琉球宮古島に行つて帰路、船を大島に着ける。大島の人に筵をもらう
		天保15年(一八四四) 武部の木原惣一氏が牛車で鉄の圧搾機により黒糖製造所を作る(一八九一年には水車動力になる)
		弘化2年(一八四五) 現和村の近政などでガジュツを密かに耕作していた
		弘化3年(一八四六) 現和村の榎本源吾、鮫島吉次郎、小山田善吉、小山田甚太、小川虎次郎、羽生孫右エ門、才川勇之允、寺入り三日。初狩の日に早く帰つたため俵田を現和村の馬飼い今鞍権次郎に与える
		弘化5年(一八四八) 庄司浦の島田利吉氏、長さ七尋巾七尺位の漁船で、日向灘瀬戸内海を航行して、隆興寺境内に住吉神社を祀る(行きはきくらげ等の乾物を積み込み、衣料品を仕入れて帰る)
		嘉永・安政年間頃(一八四八~六〇) 大風により現和村人家五四軒、梵寺一棟倒れる
		嘉永3年(一八五〇) 金子三〇〇疋を現和村の村吏及び庶民に与える(労力奉仕のため)
		嘉永4年(一八五二) 庄司浦の水工一八人、田之脇の水工二六人に米四斗を与う。屋久島の商船の水難を救う
		安政3年(一八五六) 現和の台運院房・中之坊・大聖寺が廃止される
		慶応2年(一八六六)

		和暦(西暦)
大正	昭和	現和校区の(でかい)つ
		11年(一八七八) 現和村の村人に金五円を与える。米一四苞を献上したことによる
		15年(一八八二) 十一月現和小学校校舎立つ
		19年(一八八六) 簡易小学校が武部にでき、武部と浅川の三年生までが一年間通う
		20年(一八八七) 川氏集落に甌島から移住
		23年(一八九〇) 保安条例ができる。現和村の羽生利兵衛、鮫島兵助、榎本龍助を依頼人とする
		25年(一八九二) 現和駐在所設置
		30年(一八九七) 現和小学校々舎改築落成
		40年(一九〇七) 庄司浦の児童が安納小学校から現和小学校に転校する
		41年(一九〇八) 近政に山下徳三氏が澱粉工場を設置する
		42年(一九〇九) 戸長時代から校区共同作業としていた海草採取に続き、ブト・フノリ・ナガラメ採取と労力奉仕で、校区の財政を賄う(一九二二年まで)
		4年(一九一五) 小字、牟田、隈崎の田圃(四町八反歩)の排水工事を、区民総出で行う(労力は日当払い)
14年(一九二四) 現和で落花生栽培が始まる		
3年(一九二八) 二月一日、吉平集落が上之町・下之町集落に分離する		
5年(一九三〇) 風本神社新築		
9年(一九三四) 浅川の橋(田上橋)ができる 小学校から風本までの参道ができる 西俣の大正橋がコンクリート造りになる 現和郵便局開設		

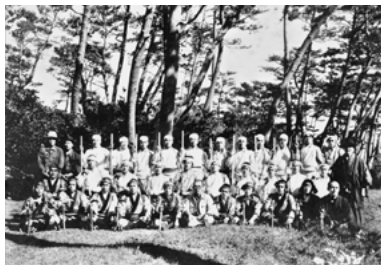
		和暦(西暦)	現和校区のできごと
		11年(一九三六)	湊川橋(武部)がコンクリート造りになる 校区婦人会が発足する 近政に放牧場ができる
		20年(一九四五)	四月二十一日～十月、小学校児童が伊佐郡羽月へ疎開 六月十六日、木原平五郎氏逝去
		22年(一九四七)	中学校開校式(小学校々舎で授業開始)二年後に校舎落成
		23年(一九四八)	近政に電気利用組合ができる
		25年(一九五〇)	武部に小型発電所ができる
		30年(一九五五)	三月、相良民二氏が米作日本一農林大臣表彰を受ける
		37年(一九六二)	原田休之助氏が内閣総理大臣褒賞を受ける
		46年(一九七一)	現和へき地保育園設置
		51年(一九七六)	市立現和保育園完成
		53年(一九七八)	現和小学校創立一〇〇周年記念式典
		55年(一九八〇)	現和浅川に集会室完成
		56年(一九八二)	現和庄司浦の広報研修施設落成式
		59年(一九八四)	現和地区生活改善研修センター(拠点地区村づくり整備事業)完成
平成	元年(一九八九)		九月十五日、第五回極東・南太平洋身体障害者スポーツ大会(神戸市)で、現和田之脇の田屋光二(日本代表)が、走り高跳びで準優勝(日本記録)、走り幅跳びでも準優勝
	4年(一九九二)		現和校区農業構造センター落成
	21年(二〇〇九)		現和中学校閉校



馬耕大会にて(昭和35年)
(野邊まち子氏提供)



健児団訓練(昭和前期)(吉田雄二氏提供)



棒踊・鎌踊か?(野邊まち子氏提供)



農作業風景(野邊まち子氏提供)

暮らしの風景写真

		和暦(西暦)	現和校区のできごと
令和	4年(二〇二二)		一月二十六日、現和出身の島津海(本名・中園空)が十両へ昇進
	5年(二〇二三)		十二月二十五日島津海新入幕